

学生の英語能力と動機づけ・主体的な学習時間 向上プログラムの効果検証

Assessing Effectiveness of an English Grammar Program for Enhancing English skills, motivation and Self-directed learning

小林 祥一¹・中村 孝¹・谷川 宮次²・渡辺 浩一³・片山 美紀³
KOBAYASHI Shoichi, NAKAMURA Takashi, TANIKAWA Miyaji,
WATANABE Koichi and KATAYAMA Miki

キーワード：やり直し英文法講座・リメディアル教育・英語教育・文法指導・学習方略

問題と目的

高等教育機関の責務の一つにリメディアル教育がある。日本リメディアル教育学会（2019）はリメディアル教育を次のように定義している。（1）「リメディアル教育」＝「学習・学修支援」（2）大学院生を含む高等教育機関に学ぶ全ての学生と入学を予定している高校生や学習者に対して、必要に応じてカレッジワークに係る支援を高等教育機関側が組織的・個別に提供する営み、またその科目・プログラム・サービスの総称

〈日本リメディアル教育学会第15回全国大会・総会にて承認：2019年8月27日〉

また、藤田（2006）はさらに具体的に、リメディアル教育とは、「本来は大学入学前に習得しているはずの高校課程の学習内容を、入学後に補習することを指し」、「ある教科について『高校卒業程度の学力』を確実に身に付けることを目的とした教育」のことであると定義している。本学においてもまさに藤田の定義通り、プレイスメントテストで低学力に振り分けられた学生の英語授業は中学高校英語の再学習そのものであった。そのような状況の中で、他大学でも様々な形で学習支援の制度を設けているが、本学では授業とは別に、大学院入試対策、他大学への編入学試験対策、英語教員採用試験対策など一般の学生以上に英語学力を必要とする学生たちが利用できる「学習サポートセンター」が設けられ、各学生の必要に応じた英語リメディアル教育が行われていた。第一筆者はそこでグループ指導や個人指導という形で学生に英語教育を行ってきた。

斎田（2014）の調査報告に見られるような生徒の英語学力の継続的な低下傾向を目にして、リメディアル教育として英語教育をする潮流は分かるが、リメディアル教育として対応するのでは遅いのではないかという危惧もある。事実、英語教育に関するリメディアル教育において、まだその成果を十分な信頼性を持って説明しているものはないと思われる。例えば、長谷川（2020）は外国語学科でプレイスメントテストの結果、5つあるクラスの中最下位の基礎クラスに配置された19名を対象に、必修科目の90分30回の英語のリメディアル教育において、教え合いによる協同学習の手法を用いてその効果を検証した。その結果、事後アンケートによる自由記述の結果では「楽しい」、「理解が深まる」というコメントが多くみられたと報告している一方で、一斉講義型の授業

¹比治山学園教育研究開発センター

²比治山大学短期大学部総合生活デザイン学科

³比治山学園法人事務局

と比較して、確認テストの結果に差はほぼ見られなかった。

小湊（2021）は、英語のリメディアル教育において、語順を活用した文法指導の効果検証を行った。関係代名詞の指導に関して、従来用いられている2文結合教授法と比較して、肯定的な回答の割合が多いことが示されたと述べているが、統計的な差は認められていない。

大藪・藤田（2021）は、英文理解時の語義検索行動が、辞書の種類や英語の習熟度によって差があるか検証した。141名の大学生を対象に調査した結果、辞書の種類では差がみられなかったが、習熟度の高群が低群に比べて語義検索行動で有意に高い得点を示した。また、スマホ・オンライン辞書を用いた習熟度低群は、意味選択ではなく品詞選択で間違える傾向があることを指摘しているが、統計的な差は認められなかった。

これらのように、高等教育機関で英語教育をリメディアル教育することは非常に難しく、今まさにその方法論は過渡期であると言える。そのような中、小林（2020）は、高等教育機関におけるリメディアル教育としての英語教育において、明示的文法指導の重要性と効果的な利用方法を検証することの必要性を指摘している。本研究では、明示的文法指導を行ったリメディアル教育の実践効果を、学生の動機づけや学習方略といった内面や行動面の変化に着目し、その有用性を検証することを目的とした。

方法

調査協力者選定手続き：新入生アンケートにて、本プログラムに興味があるか、説明会参加希望の有無を尋ねた。その後、説明会に参加した学生及び説明会に参加できなかったがプログラム参加希望であった学生を対象に案内した。

調査協力者：大学1年生5名、短期大学部1年生3名の合計8名

調査内容：

- 1 **英語学習動機尺度：**久保（1997）により信頼性と妥当性が確認された「充実・訓練志向 因子」と自尊・報酬志向因子の合計22項目について「1ほとんどあてはまらない」から「5よくあてはまる」の5件法で尋ねた。
- 2 **学習方略尺度：**久保（1999）により信頼性が確認された「一般的方略」因子（「これまでに習ったこと同士の関係を整理する」「単語の意味ごとに分類する」など）と「大意伝達方略」因子（「英文を読むとき、いちいち新しい言葉を辞書で調べない」「会話や英文を読むときには、わからない部分にこだわらないで全体の意味をとるようにする」など）の合計22項目について「1ほとんどあてはまらない」から「5よくあてはまる」の5件法で尋ねた。
- 3 **英語力診断テスト：**清水（1989, p103-116）により作成され、英検テストとも相関が確認された、多肢選択式問題を用いた。この問題は、一つの長文の中に、穴埋め問題が25問設けられており、4つの選択肢から適切な単語を選択する問題であった。
- 4 **事後評価アンケート：**11月時点における本プログラムに対する評価を「本プログラムに参加して英文法に関する知識や技能は成長したと思いますか」という質問に「0全くそう思わない」から「4とてもそう思う」の5件法で、「今回プログラムと関連する予習・復習時間は最初の頃と比べて増えましたか」と「本プログラムと関連する主体的な学習時間は最初の頃と比べて増えましたか」という質問に「1減った」から「5増えた」の5件法で、「今回のプログラムへの満足度はどのくらいですか？」という質問に「1非常に不満である」から「6非常に満足である」の6件法で回答を求めた。さらに「本プログラムに参加して英文法に関する知識や技能が成長したと思う点やエピソードをできる限りたくさん書いてください」「本プログラムに参加して

次にチャレンジしてみたいことは何ですか」という質問に自由記述で回答を求めた。

調査時期：2022年6月と11月に調査を実施した。

プログラム内容：基本的に週に2回(1回90分)のペースで、5月末から11月までに24回実施(表1)。

文の主要素や品詞，文の構造や発音記号から始まり，助動詞や受動態まで解説用の資料・確認用問題を作成し扱った。参考資料として、『チャート式 基礎からの新々総合英語』（高橋・根岸，2013）を用いた。

表1 授業回と主な学習内容一覧

| 授業回 | 主な内容 |
|-----------|--|
| 第1回～第6回 | 文の主要素，品詞，学習に必要な基礎知識，基本ルール，発音記号 |
| 第7回～第13回 | 文の種類，文の構造，不規則変化動詞，動詞の語形変化 |
| 第14回～第18回 | 時制，副詞，句動詞，文修飾副詞，関係代名詞，完了時制（継続） |
| 第19回～第24回 | 同格，比較，大過去，動作動詞の継続，動名詞／不定詞を目的語にとる動詞，助動詞概説 |

プログラム時期：2022年5月から2023年3月まで，プログラムは年間を通して実施される。

結果

1. 受講生の決定と人数

新入生アンケートの回答者数：471名 対象者数：574名（回収率82%）にて，本プログラムに興味を持った学生が171名，説明会参加希望者が39名，そのうち12名が説明会に参加し，最終的に8名（短大生3名，大学生5名；内2名は説明会に不参加）がプログラムに参加した。

2. 英語学習動機尺度と学習方略尺度，英語力診断テストの結果

久保（1997）の英語学習動機尺度と久保（1999）の学習方略尺度，及び清水（1989，p103-116）の英語力診断テストについて，プログラム受講生8名を対象に，6月と11月に実施した。最終的にプログラムを継続して参加し，両時期で回答に不備がない5名のデータを分析対象とした。英語学習動機尺度の「充実・訓練志向」因子と自尊・報酬志向」因子，学習方略尺度の「一般的方略」因子と「大意伝達方略」因子の4つにおいて，2つの時期で対応のあるt検定を行ったところ，一般的方略因子において，事後の値が事前の値よりも統計的に有意に高い値が認められた（ $t(4) = 2.689, p < .05$ ）（表2）。さらに効果量を確認したところ， $\Delta = .86$ と大きい値が認められた。

次に，清水（1989）の英語力診断テストについて6月と11月の結果を比較したところ統計的に有意な差は認められなかった（ $t(5) = 0.73, p = .50$ ）。しかし，出席日数とテストの結果には，事前・事後どちらのテストの結果も相関が認められた（ $r = .688, r = .701$ ）。

表2 プログラム参加前後における英語学習動機と学習方略の差の検討 (N = 5)

| | 6月 | 11月 | t 値 |
|---------|---------------|---------------|-----------|
| 充実・訓練志向 | 3.36 (.94) | 2.93 (.85) | 1.64 n.s. |
| 自尊・報酬志向 | 3.00 (.53) | 2.98 (.47) | 0.13 n.s. |
| 一般的方略 | 2.25 (.85) | 2.97 (.69) | 3.40 * |
| 大意伝達方略 | 3.20 (.89) | 3.24 (.72) | 0.28 n.s. |

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

3. 受講生自由記述の結果

回答が得られたのは3名だけであったが、「成長実感」「予習・復習時間」「主体的な学習時間」「満足度」は全て肯定的な回答であった。成長実感に関する記述では、問題を解いていて、“文法の理解ができていると自分でわかること”や“後期の授業では英文を訳すことがよくあって、最近は正しく訳せることが多くなったと思う。また、長文の意味がとりやすくなったように感じる。”という記述が得られた。

4. プログラムを通しての授業者の気づき

本プログラムを担当した授業者の気づきを学生ごとにまとめた。

学生 A しっかり準備ができている状態で授業に臨み、予習の仕方も指導者の意図を理解したしっ
かりしたものである。設問に対する解答だけでなく、文全体を理解するために未知の単語を辞書
で確認し、文法事項を文法参考書で確認した解答を用意している。学習開始時には辞書はもって
いなかったが、授業中に辞書で確認する作業を何度か行うと新しく電子辞書を購入し活用してい
る。授業中に文法参考書を開かせて確認した事項は、きちんと復習できるように付箋を利用した
り、ノートにメモを取ったりするなど、自分で学習を進めていくことができるようになってい
る。

学生 B 学習開始時点では、メンバーの中では高校での学習が最もできていたようで、文法力に関
しては最も力があつた。授業中に辞書で確認する作業を何度か行うと辞書を持参するようになり、
辞書を利用しながら予習するようになった。英文を書かせると、比較的しっかりした英文が書け
るが、復習が不十分なようで、新しく学習した事項の定着率はあまり思わしくない。自立した学
習者になるためにはもう一段階前進する必要がある。

学生 C 欠席が多く、学習よりも優先することがある様子である。しかしながら、大学入学までの
学習の成果と思われる文法力があり、また、社会的な知識も他の学習者よりも十分であるため、
問題に使われている英文の内容に関しては理解が深い。授業では予習が足りないことがしばしば
あるが、準備してきたところの解答は概ね正解であり、自立した学習者になりつつあると感じさ
せる学習態度である。

学生 D 学科の授業やアルバイトのため時間が十分に取れず、予習が不十分なことがあつたが、授
業中の学習態度は意欲的で、このまま継続できれば力を伸ばせると期待したが、後期になり学科
の授業準備や課題などのために時間的に継続が困難になり途中で学習を断念するに至った。問題
演習で解答の根拠を求めると、文法参考書の該当箇所を正確に指摘するなど、自立した学習者
になりつつあると感じていただけに残念である。指導者の経験からすると、多くの学生はこのよう

なことができるようになるまで半年以上の期間を必要とするが、この学生は約3か月でこのようなことができるようになっていた。

その他にも2名の学生が本プログラムに10回以上参加したが、学科の課題等で時間が取れず途中で断念した。

考察

1. プログラムの効果と指導方法について

分析の結果から、予習復習時間だけでなく、主体的な学習時間も増加傾向にあり、プログラムの満足度も肯定的なことから意義のあるプログラムであったことが示唆された。特に事前事後で、英語学習動機に差は見られなかった一方で、学習方略のうち、一般的方略が有意に向上していたこと。この一般的方略の中でも「これまでに習ったこと同士の関係を整理する」や「単語の意味ごとに分類する」「なぜわかってないか考える」「英文を読むとき、文法や構文を考えながら読む」「答の出し方について自分自身や他の人に説明してみる」「わからない単語は、意味がわかる部分に分けて全体の意味をとろうとする」といった項目の得点が大きく向上していた。この点は、本プログラムが文法指導を通して、英文読解のための知識や技能を培うだけでなく、本学が育成を目指す「4×3の比治山力」の情報収集力や論理的思考力に相当する能力を育成したことが示唆される。このような汎用的能力は、授業者の気づきに示されるように、学生が自立的な学習者になる基盤になっているとも考えられ、文法指導を通して繰り返し行った学び方・考え方を定着させるという指導方法の重要性が示唆された。

2. 主体性を育む要素について

主体的な学習時間が顕著に向上していた学生の特徴として、本プログラムに大変満足しており、成長実感も高く、予習復習時間も増えたと実感していた。また、自由記述の傾向から成長を実感するエピソードがより具体的であり、自身の課題にも気づいていることがあり、授業者からみても特に成長した学生であった。授業者の気づきに記述されている内容から、「参考書等で確認する」「付箋を利用し復習しやすくする」「ノートやメモを取る論拠を持って答えを導く」といった学習方略を身につけることが、自立的・主体的な学習者を育む要素だと考えられる。

3. 本研究の課題と限界および今後の展望

まず、本研究の課題として、プログラム参加者の少なさが挙げられる。また、参加者は言語系の学科だけでなく多様な学科から参加が見られたため、参加動機やその強さも様々であり、今後参加人数が増える場合には、その辺りも考慮して分析していく必要がある。今後は共通科目などの学習者を対照群としたり、一事例の実験デザイン（D H・バーロー& M・ハーセン（1988））なども参考にしたり、少数の実践群であっても、多時点におけるデータサンプリングと分析を行うことが期待される。

次に、本研究の限界として、効果検証の結果についてプログラムが短いために限定的になることが挙げられる。本来英語の技能は数年単位で成長が認められるものであり、本プログラムはまだ半年ほどの実践であるため、今後さらに継続してより長期的な取り組みを経た効果を検証することが期待される。

最後に、今後の展望として、カリキュラムの見直しや本プログラムのような学生が主体的に参加できるプログラムのセッティングの難しさが挙げられる。この度、本プログラムに興味を持った学

生は171名おりそのうち説明会への参加希望者が39名であった。しかし最終的な参加者は8名であった。これらの数値は英語能力向上へのニーズの高さを表す一方で、プログラム日程等環境セッティングの難しさも表している。また、参加者の中でも、学科の課題の忙しさなどから途中で断念せざるを得なくなる学生も出てしまった。昨今の高等教育機関においては、カリキュラムの精選と統合が求められているが、本プログラムで得られた知見、特に主体的な学修を促す授業設計について、通常授業の授業外学修時間の増加へ応用することが有用であると示唆された。

引用文献

- D H・バーロー, M・ハーセン (1988) SINGLE CASE EXPERIMENTAL DESIGNS; Strategies for Studying Behavior Change (高木俊一郎・佐久間徹監訳「一事例の実験デザイン: ケーススタディの基本と応用 新装版」二瓶社)
- 小林祥一 2020 英語リメディアル教育における英文法指導の課題 ―学習者はどこで躓いているか―. 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 6, 106-120.
- 久保信子 1997 大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討. 教育心理学研究, 45, 449-455.
- 久保信子 1999 大学生の英語学習における動機づけモデルの検討―学習動機, 認知的評価, 学習行動およびパフォーマンスの関連. 教育心理学研究, 47, 511-520.
- 清水裕子 1989 特集・英語能力テストに関する研究 研究報告7 英検筆記試験とクローズ・テストに見られる相関に関する研究. (財団法人日本英語検定協会「STEP BULLETIN 特集: 英語能力テストに関する研究」) 103-116.
- 小湊彩子 2021 英語リメディアル教育を必要とする学生に適した文法指導を目指して. リメディアル教育研究, 15, 83-90.
- 大藪修一 藤田恵里子 2021 EFL 学習者の辞書タイプと英語熟達度が語義選択の正確性に与える影響. リメディアル教育研究, 15, 45-55.
- 長谷川文子 2020 英文法授業における協同学習の効果 ―リメディアル教育を必要とする大学生を対象として―. 拓殖大学語学研究, 142, 137-153.
- 斉田智里 2014 英語力はどう測るのか テストの経年比較からわかること. 英語教育, 62 (11), 16-18.
- 藤田哲也 2006 初年次教育の目的と実際. リメディアル教育研究 1, 1-9.
- 日本リメディアル教育学会 2019 『リメディアル教育』の定義
<http://www.jade-web.org/guidance/definition.html> (2022年11月30日確認)
- 高橋 潔・根岸雅史 2013 チャート式 基礎からの新々総合英語. 数研出版.

付記

本研究は、令和4年度比治山大学研究助成を受けて実施された。本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

本研究のプログラムに参加・調査協力してくれた学生のみなさんに感謝申し上げます。